

# 令和3年度病虫害発生予察情報

## 発生予報第6号

令和3年8月30日  
発表：福島県病虫害防除所

### 1 普通作物

作物名	病虫害名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
大豆	紫斑病	全域	—	平年並	配付種子量から見た種子更新率は平年並と考えられる(±)。 天候予報(8月26日発表1か月予報)によると、9月の降水量は平年並と予想されている(±)。	開花後20～40日に薬剤を1～2回散布する。その際、薬剤はサヤに十分付着させる。 収穫適期に収穫を行い、収穫後は速やかに乾燥調製を行う。
	吸実性カメムシ類	全域	—	平年並	8月中旬の巡回調査では、吸実性カメムシ類の発生ほ場割合は平年並だった(±)。	発生が見られる場合は莢着期(8月中下旬頃)～子実肥大期(9月上～下旬頃)に薬剤防除を実施する。
	フタスジヒメハムシ	全域	—	平年並	8月中旬の払い落とし成虫数は平年並だった(±)。	発生が見られる場合は子実肥大期(9月上旬頃)に薬剤防除を実施する。
	マメシンクイガ	全域	—	平年並	前年の被害粒率は平年並であった(±)。	3年以上連作すると被害が多発するので、適切に防除を実施する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

### ○注意が必要な病虫害

水稲	<p><b>■斑点米カメムシ類</b></p> <p>浜通りではクモヘリカメムシの発生が多いため、今後の発生動向に注意してください。</p> <p>乳熟期(出穂7～10日後)に薬剤散布を行った後も発生がみられる場合は追加防除を検討してください。</p> <p>使用する薬剤等の詳細についてはホームページに掲載の7月29日付け防除情報を参照してください。</p>
----	--

### 2 果樹

作物名	病虫害名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	
	褐斑病	全域	—	やや多い	新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)	中晩生種で発生が多い場合は、防除を徹底する。 8月3半旬のまとまった降雨により感染が助長された可能性があるため、今後の発生動向に注意する。

炭疽病	全域	—	平年並	果実での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	今後降雨が予想される場合は、9月上旬以降にキャブタン剤を散布する。その際、総使用回数に十分注意する。罹病果は園外に持ち出すなど適切に処分する。 8月3半旬のまとまった降雨により感染が助長された可能性があるため、今後の発生動向に注意する。	
キンモンホソガ	中通り 会津	— —	やや多い 平年並	新梢葉での発生ほ場割合は、中通りでは平年よりやや高く(+)、会津では平年並であった(±)。 フェロモントラップの誘殺数が中通りの1地点で8月3～4半旬に増加した(+)	今後の発生動向に注意する。	
シンクイムシ類	全域	—	やや多い	広範囲に果実被害が確認され、発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)	発生動向に注意し、中晩生種で発生が多い場合は、防除を実施する。被害果は園外に持ち出すなど適切に処分する。	
ハマキムシ類	全域	—	平年並	果実被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。		
ハダニ類	全域	—	やや多い	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年よりやや高く、寄生頭数の多いほ場も見られた(+) 天候予報によると、向こう1か月の気温は高いと予想されている(+)	園地での発生状況をよく観察し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。	
モモ	せん孔細菌病	全域	—	やや少ない	新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや低かった(-)	秋期防除を徹底し、越冬菌密度の低下を図る。 8月3半旬のまとまった降雨により感染が助長された可能性があるため、今後の発生動向に注意する(令和3年8月30日付け防除情報参照)。
	モモハモグリガ	全域	—	やや少ない	新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや低かった(-)	発生が多い場合は、収穫後にも防除を行い、越冬密度の低下を図る。
	ハダニ類	全域	—	やや少ない	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年よりやや低かった(-)	

ナシ	黒星病	中通り 浜通り	— —	やや多い 平年並	新梢葉での発生は、中通りでは発生程度は低い園地が多いものの、広範囲で発生が確認され、発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)。浜通りでは平年並であった(±)。	「幸水」収穫後に秋期防除を実施する。
	シンクイムシ類	全域	—	平年並	果実被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	発生が多い場合は、防除を実施する。被害果は園外に持ち出すなど適切に処分する。
	ハマキムシ類	全域	—	平年並	果実被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	
	ハダニ類	中通り 浜通り	— —	平年並 やや多い	新梢葉寄生の発生ほ場割合は、中通りでは平年並(±)、浜通りでは平年よりやや高かった(+)。 天候予報によると、向こう1か月の気温は高いと予想されている(+)	園地での発生状況をよく観察し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。
果樹共通	カメムシ類	全域	—	平年並	リンゴ、ナシの果実被害の発生ほ場割合は平年並であったが(±)、ナシの一部の園地では被害程度が高かった。	園地での飛来状況をよく観察し、飛来を確認したら薬剤散布を実施する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

果樹共通	<p><b>■吸蛾類</b></p> <p>果実が熟し始めると、吸蛾類の成虫が夜間に果樹園に飛来し、果実を吸汁加害することがあります。そのため、吸蛾類の生息地である山林原野に近い園地では注意が必要です。対策として、多目的防災網等の物理的防除、糖蜜トラップ(砂糖200g、酒200cc、酢200cc、水1400ccを混ぜ合わせたもの)を誘引源とした食餌誘殺が有効です。</p>
------	---

3 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト(被覆栽培)	灰色かび病	全域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年並であった(±)が、発生程度の高いほ場割合が高かった(+)	多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	葉かび病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。
	アブラムシ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 施設開口部をネット被覆していない場合、発生に特に注意する。

	コナジラミ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
夏秋キュウリ(露地栽培)	べと病	全域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年並であった(±)が、8月中旬に降雨が続いたことと、今後の天候予報では平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想される(+)	降雨が続くと発病しやすくなるため、発生初期から防除を実施する。
	うどんこ病	全域	—	やや少ない	発生ほ場割合は平年よりやや低かった(-)。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。
	褐斑病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並より低かった(-)が、8月中旬に降雨が続き、天候予報では平年に比べ雨の日が多いと予想される(+)	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。
	炭疽病	全域	—	多い	発生ほ場割合は平年より高く(+)、8月中旬に降雨が続いたことと、今後の天候予報では平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想される(+)	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。
	アブラムシ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年よりやや低かった(-)が、8月中旬に降雨が続いたことと、今後の天候予報では平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想される(+)	低密度時から防除を徹底する。抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
キク(露地栽培)	白さび病	全域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年並であった(±)が、8月中旬に降雨が続いたことと、今後の天候予報では平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想される(+)	降雨が続くと発病しやすくなるため、予防散布に努める。 品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。
	アブラムシ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	気温が上昇すると急激に増殖することがあるので、ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。 抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。

	アザミウマ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	気温が上昇すると急激に増殖することがあるので、ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
リンドウ ※過去6年間の平均値と比較	<b>葉枯病</b>	<b>全域</b>	<b>—</b>	<b>やや多い</b>	<b>発生ほ場割合は例年よりやや高かった(+)。</b>	<b>降雨が続くと発病しやすくなるため、予防散布に努める。</b>
	ハダニ類	全域	—	やや少ない	発生ほ場割合は例年よりやや低かった(-)。	気温が上昇すると急激に増殖することがあるので、ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
	リンドウホソハマキ	全域	—	やや少ない	発生ほ場割合は例年よりやや低かった(-)。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、 (-) は少発要因、 (±) は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

夏秋トマト (被覆栽培)	<p><b>■タバココナジラミと黄化葉巻病</b></p> <p>本年も黄化葉巻病の発生が中通り南部で確認されています。本病はウイルス病であり、タバココナジラミの媒介により感染します。汁液伝染、種子伝染、土壌伝染、また、オンシツコナジラミ等による虫媒感染はしません。育苗期から媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底することが重要です。</p> <p>本病の発生を認めた場合、侵入・脱出防止を心がけ、ほ場内での発生密度が高くないように発生初期から適切な防除を行ってください。また、抑制栽培や冬春トマト栽培への持ち込み等がないよう、防除対策を徹底してください。未発生地域においても、購入苗等により持ち込むおそれがありますので注意してください。</p> <p>病害虫防除所 HP に掲載している病害虫防除情報「注意喚起 黄化葉巻病 (TYLCV) のまん延防止対策」、病害虫ライブラリー野菜花き類「コナジラミ類」もご覧ください。</p> <p><b>■トマトかいよう病</b></p> <p>ほ場での発生が確認されています。本病は細菌病であり、種子や土壌中の病原菌が第一次伝染源となり、その後、芽かきや収穫、誘引などの管理作業による二次伝染により被害拡大します。発病が疑われる株は管理作業を後回しにし、作業手袋やハサミ等をこまめに消毒し、被害拡大を防ぐようにしてください。万が一、ほ場で発生した場合は、発病株を速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分してください。</p> <p><b>■トマトすすかび病</b></p> <p>すすかび病は葉かび病の病徴は酷似しており、肉眼での判別は困難です。本年もすすかび病の発生が確認されていますので、換気を十分に行うとともに少発生時から防除を行ってください。</p>
リンドウ	<p><b>■黒斑病</b></p> <p>黒斑病の発生が確認されています。本病の病斑は、葉枯病や褐斑病、灰色かび病と似ているので注意が必要です。高温多湿条件で発生が助長され、高温日照不足の天候が続くと上位葉への進展が早くなる可能性があります。ほ場をよく観察し、予防散布に努めてください。</p>
野菜・花き共通	<p><b>■タバコガ類</b></p> <p>巡回調査において、果実の食害が確認されています。また、会津と浜通り北部ではフェロモントラップの誘殺数が多くなっています。本種は、トマトやキクの新芽や果実の内部に潜り込んで食害します。寄生や被害が見られた場合は速やかに防除を行ってください。</p>

○侵入を警戒している病害虫

かんしょ (サツマイモ)	<p><b>■サツマイモ基腐病</b></p> <p>本病は糸状菌で、サツマイモ塊茎の腐敗や葉・茎が枯れる病気です。はじめに地際部の茎が黒～暗褐色に変色、腐敗し、やがて茎葉が萎凋し、枯死します。発病が藩梗(茎と塊根を繋ぐ部分)を経て塊根まで拡大すると、なり首側から塊根が腐敗します。罹病した塊根やつるで伝搬し、植物残渣が翌年の伝染源になります。</p> <p>本病は平成30年に沖縄県で初めて確認され、その後、急速に発生が拡大し、近県で発生が確認されています。</p> <p>発生県からの苗購入があることから、本県にすでに侵入している可能性が高く、ほ場にまん延すると防除が困難になるため、生育不良の株を見つけた際には、各農林事務所農業振興普及部・農業普及所、病害虫防除所又は農業総合センター生産環境部作物保護科へ連絡ください。</p>
-----------------	---

より詳しい発生状況や防除対策は、

福島県病害虫防除所ホームページ<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>をご覧ください。

お問い合わせはTEL:024-958-1709、FAX:024-958-1727またはe-mail:yosatsu@pref.fukushima.lg.jpへお願いします。

◆福島県では6月10日から9月10日まで令和3年度農薬危害防止運動を実施しています◆  
農薬を使用する際は、ラベルをよく読んで正しく使用しましょう。